



特集：ゆりちゃんハウス 訪問記



ファミリーホーム ゆりちゃんハウス 訪問記

百花草 澄子さん、真里さん

編纂部 中日青葉学園 わかば館 施設長 寺井 陽一
 知多学園 松籟荘 施設長 佐々木 仁美
 中日青葉学園 あおば館 児童指導員 加藤 有美子

FHの概要

ゆりちゃんハウスは、児童福祉法で定められた法律によって「小規模住居型児童養護事業」通称ファミリーホーム（FH）として、百花草夫婦が平成26年9月から「ファミリーホームゆりちゃんハウス」を開設し、運営しています。1つの敷地内に、赤ちゃんから95歳に至る親子4世代の家族と、ペットの猫ちゃんの中に社会的養護を必要とする児童たちを迎え、寝食をともにし暮らしています。

今回は、代表の百花草澄子さんと娘の真里さんにお話を聞きました。

FHを始めた経緯

澄子さん： 20年位前に里親ヘルパーを始めました。ニュースに少しずつ虐待の報道がされてきた時で、自分が住んでいる地域で、虐待で子どもが亡くなったというニュースがあったんです。娘たちも学生だったんですけど、どんな子どもも命の重さは一緒なのに、どうして簡単に奪われてしまうんだと思って。困ったり悩んだりしているなら、私が一緒に考えて支えてあげたいと思って里親登録をしました。里親をしていて3人預かっていた時に、最大でも4人しか預かれないし、もっと間口を広げたいと思い、平成26年9月1日にFHを開設しました。里親は手当てがすごく少なく、第一子の場合12万円程度、第二子になると7万円くらい。4人預かって、中高生がいると赤字なんです。私個人のお金を切り崩してやっていく生活になってしまい、「これじゃ塾にも通わせてあげられないね」となりまして。その子にとって手厚いサポートを受けられるように、ワンランクあげて、お給料を払って学生や専門の知識を持った人に来てもらって、風通しのいい環境を、子どものために作りたいと思いました。



ゆりちゃんハウスのパンフレット

入所の際、子どもに必ず目を通してもらっているもの。児相さん立会いの下予約書を書いて、サインしてもらいます。

FHの生活

澄子さん： 家庭って役割がありますよね。うちの場合は、お父さんはどっしり構えていていざという時は出てきてくれて応援してくれる存在。子どもが悪いことをしたら最後の最後はお父さんが出てきます。お父さんの威厳のある言葉は私たちより響くんですね。私は子どもたちにとって甘えられる存在で、思春期の子なんかは「くそばあ」なんて言いますが、困ったときは懐に抱き寄せて「お母さん」って言える存在だと思います。娘（真里さん）は、皆のお姉さんという感じで、本当にいい役割をしてくれています。また、95歳のお



特集：ゆりちゃんハウス 訪問記

ばあちゃんには必ず「おばあちゃんおはよう」ってどの子もあいさつしてくれるんです。ご飯の支度ができたときも「おばあちゃんご飯だよ」って誰からともなく声を掛けてくれます。そういった目上の人に対しての敬いとか優しさとかはうちで味わっていると思います。そういう日常の中で社会性が育っているんだなど。家庭だからそれができる。うちは赤ちゃんからおばあちゃんの色んな世代がいるので、何か特別な体験をさせてあげられているわけではないけど、一緒に時間を共にするっていうのが大事だと思います。



愛猫のココちゃん

ココちゃんも虐待を受けていた猫だそう。返所する日の朝はその子から離れさせん。また、体調が悪い時や怪我をした際にも傍で寄り添ってくれ、皆の大切な存在です。

真里さん： 私は、子どもたちに答えを出さないように、自分で考えられるように声掛けをすることを心掛けています。子どもが「〇〇をどうしたらいい？」と聞いてくると「それはこういう危険があるよね。これからできることは何だろうか」などの問い掛けをし、子どもが考えて言葉にして「そうだね、そうだね」と返して、最終的に子どもが答えを出していけるようにします。私の役割は、お姉さんの部分と、第三者的なものだと思います。子どもが父や母に怒られてしょぼくれているところを私が「どうした～？」と待ち構えています。お茶飲んで話聞いて、気分転換の場所になるようにと思っています。

印象に残っている子ども

澄子さん： ネグレクト等虐待で保護された子は、母親や父親という人たちが、すぐそこで自分の子どもを愛し世話をする様子を見て、「自分もこんな風に愛されてきたのか」と疑問をもちます。辛くて、ふたをして、見ないようにして、自分を守ってきた殻を破り、思い返し疑問を感じ、考える日が来ます。生まれてすぐ乳児院に保護され、養護施設からうちに来た子は、甘え直しが始まり哺乳瓶が離せなくなっていました。補助員である娘（真里さん）が、自分の赤ちゃんの授乳をしている際、悲しそう、うらやましそうな顔をして指をくわえてカーテンの陰から様子を見ているその子たちを、自分の赤ちゃんの授乳後、赤ちゃん抱っこして、授乳してあげました。その子たちは満面の笑みを浮かべて、とってもうれしそう、幸せそうな顔をして、離せなかった指も哺乳瓶も離すことができました。



自家栽培している野菜や果物

ニンジン、オクラ、ジャガイモ、ミカンにレモン等、たくさん育てています。百合草さんは食育にも力を入れています。子どもたちも自分で大切に育てたものは好き嫌いなくたくさん食べるそうです。



そうやって、施設ではできなかった体験をゆりちゃんハウスでし、1つ1つ生活と自信を取り戻していけるのも、欠けていた愛着の絆を少しずつ結んでいけるのも家庭養護ならではだと感じています。



大切にしていること

澄子さん： 愛着の絆がしっかりできていないと、人との距離感が近すぎたり遠すぎたりして、うまく人と関わっていきけないじゃないですか。本人に悪気はなくても、基盤がないので人との距離感がつかめなくて学校とかで嫌われちゃったりとか、自分は友達になりたいのに悪気はないのに距離が近すぎて嫌われちゃったりとかしてしまうのかなって。小さい時にしっかりと築き上げてあげないと。本当を言うとお父さんやお母さんたちでちゃんとやっていけるものだけど、それが吹けている子にはここでたくさんやってあげたい。家庭にもいろんな形があるけれど、このゆりちゃんハウスの生活の一日一日の積み重ねなのかなって思ってますね。気付いたんですけど、どの子も悲しい場面の時、涙を流さないんです。この場面は泣くところでしょって思うんですけど、自分にとって悲しいことが起きても涙が出ないんです。へらへら笑うんですよ。怒るとかではなく笑うんです。でもここでの生活で少しずつ絆ができてくると、ある日思っきり涙を流す時が来るんです。ある子は枕を濡らしてずっと一晩中泣いてるんです。「やっと泣けたね。自分の感情をストレートに出すことができたね」って思った時、私も一緒に泣きました。朝まで抱っこして泣きました。それからですね、子どもが少しずつ心を開いて落ち着いていけるようになったのは。そういうことって一日一日の積み重ねですよ。今日という日は戻ってこないで、大事に過ごそうねって思いながら生活しています。ここは施設と違い家庭なので、夜なんかは1時間でも2時間でも話を聞いてあげたいと思っています。深夜の3時や夜通し話を聞いたことも何度かあります。それができるのが家庭です。本当に必要な時に寄り添ってあげられますよね。それは忘れないようにと思っています。

真里さん： きっと私たちがそうやってやったら、子どもがいつか大切な人や自分の子どもにもやってあげる立場になってくれるとうれしいですよ。

澄子さん： 突き放さない、見捨てない。ここにいるよっていうメッセージを伝えています。

自作のハンモック
.....百合草家は自然豊かな森に囲まれています。近くの森の木にハンモックをかけ、夏の暑い日は涼んでいるそう。



百合草澄子さんと
キッチン
.....ここで皆が顔を合わせて食事します。近くの川で捕ってきた魚を自ら取ってお子さんもいるそう。